

令和 7 年度島根県立大学短期大学部

学校推薦型・総合型選抜 社会人 帰国生 私費外国人留学生特別選抜

文化情報学科 小論文問題

【問題】次の文章を読み、ミツユビナマケモノは何のために生きているのか、そこに意味というようなものがあるのか考えを述べよ。それをふまえたうえで、あなた自身は何のために学ぼうとするのか、そこにどのような意味があるのかについて、全体を 800 字以内にまとめて論述せよ。

オリンピックで日本が得意な競技の一つに、ボルダリングとか、スポーツクライミングとかいうのがあるらしい。テレビで紹介しているのを見ると、コンクリートの壁にはめ込んだ石を、指でつまむように掴み、それで全体重を支えて、次はこの石、その次は……と、素晴らしいスピードで、上へ、上へと壁を登っていくのである。

選手の体は、筋肉隆々。女の選手でも、身体に余分な脂肪なんかついていない。

ところで、南米、中南米に、年中、これと同じようなことをしている哺乳類がいる。全身もこもこした剛毛に覆われた、一見、猿のような獣である。ただし、こっちは、スピードなんか競わない。ゆっくりゆっくり、よろよろと、じれったいような緩やかさで木の上を降りたり上がったりする。

しかも、動かない時は、一日に 20 時間以上も、木の枝にしがみついたまま、うつらうつら眠っているらしい。この動物の天敵は、樹上では、世界最大のワシの一種、オオギワシであり、地上近くではジャガーであるが、色彩が樹皮に似ていて、樹上で動かずにいれば、樹そのものとほとんど区別がつかない。

男やもめにウジが湧く、という古い格言？があるけれど、ナマケモノも、高温多湿のジャングルの木の上でじっとしているわけであるから、雨もかかるし、もこもこした毛に緑色の藻や苔が生える。そして、それがまた、擬態、あるいは擬装に一役買っているようである。

ナマケモノというのは、明治の動物学者がつけたのであろう、昔の人らしい、うまい命名である。これには何種類かいるのだが、その中でもミツユビナマケモノという種類は、一日にたった 8 グラムとか 10 グラムぐらいしか、木の葉を食べないのだという。体長は 40 センチから 50 センチもあるというのだから、一日 8 グラムの木の葉でよくもまあ、生きていけるものである。これでは食事というより、ほんのお口汚しである。

ちなみに、オーストラリアのコアラは、これもまた、ナマケモノと同じように、木にしがみつки、一日のほとんどの時間を眠って過ごしているのだが、ユーカリの葉を、一日に 500 グラムは食べるという。コアラも、無駄な動きはしないし、少食なのであるが、それでもこれぐらいは食う。

人間の場合で考えてみると、スポーツクライミングの選手は、あれだけの運動をするのだから、さぞ腹が減ることであろう。よほどたくさん食べなければあんなに力の要る運動はできまい。

ナマケモノは、新陳代謝を極力抑え、哺乳類でありながらほとんど変温動物と化して、体温さえ周りの気温に合わせ、エネルギーをできるだけ消費しない暮らし方をしているのである。その分、食べることに情熱がないというか、すぐそばに食料となる木の葉がいくらでもあるのに、餓死してしまうことさえあるという。

言ってみれば、スポーツクライミングの選手とまったく正反対の生き方をしていることになる。そんなことで、何が楽しいか、と訊きたくなるけれど、ナマケモノもまた、人間の選手に、同じことを訊き

返してくるかもしれない。

いや、我々はいったい、何のために生きているのか、そもそもそこに、意味というようなものがあるのか、ナマケモノの生態は、それを考える手がかりになりそうである。

そんなミツユビナマケモノが、一週間に一回とか、10 日に一回とか、木の上から降りてくる。ゆっくりゆっくり、慎重に、と心がけているわけではないだろうが、なにしろ、人間のスポーツ選手と違って筋肉が発達していないし、よろよろと、といった感じで降りてくる。ナマケモノの毛を剃ってみたら、ひどく痩せた骨と皮の体をしているに違いない。一日に木の葉 8 グラムで肥れるわけがない。宮沢賢治の理想では、人間なら、一日に玄米 4 合と、味噌と少しの野菜が必要なのだ。

ミツユビナマケモノはなぜ、地上に降りてくるのか、といえば、それは排泄するためなのである。いくら食べる量が少ないと言っても、出るものは出る。もつとも、その量は少ない。しかし、木の上からばらばら落とせば良いものを――現に他種のナマケモノはそうしている――ミツユビナマケモノは、律儀に木の根方まで降りてくる。途中で手足を滑らせたら、命綱はないから、落下して死ぬ。しかも地上には、ジャガーのような恐ろしい敵がいる。だから、用便は命懸けなのである。

ミツユビナマケモノは、そんな危険を冒し、下まで降りてくると、尻尾で地面に穴を掘って、そこに糞をする。すると小さな、まるでシミ（紙魚）のように、身のこなしの素早い 1 センチ足らずの蛾や、小型の甲虫がどこからともなく姿を表して、新鮮なその糞に殺到する。

蛾はどこから来たのか。実は、ナマケモノの毛の中に常時住み着いているのである。そして、糞に生みつけられた卵から孵化した幼虫は、その糞を食べて成長し、やがて蛹化する。その蛹から羽化してきた蛾の名前は、ナマケモノメイガ（クリプトセス）、名前の通り地味なメイガの仲間である。メイガというのは食品倉庫にいて、米麦粉や大豆などに被害を及ぼす小型の蛾である。

（略）

ナマケモノメイガの成虫は、100 匹とか、かなり多数が、一頭のミツユビナマケモノの毛の中に住み込みで暮らしている。

蛾どもは成虫である。つまり、これが生殖ステージであるから、人間で言えば 18 歳以上、ミツユビナマケモノの毛の中で歓楽を尽くし、狂態を繰り広げて、蛾的人生の楽しみを味わっているのである。挙げ句の果て、あろうことか、蛾はナマケモノの毛の叢を便所にしてしまう。

ナマケモノにとっては迷惑な、人間なら背徳的なまでのその行為が、実は迷惑どころではなく、ミツユビナマケモノの毛の中の生態的環境はそのために豊かになるのである。

すなわち、毛の叢が蛾の撒き散らした糞によって窒素分豊かになると、苔や藻類が増え、緑の衣を着たナマケモノもそれを少し食して、食料の足しにすることができるという。

そもそも、ナマケモノの先祖は、メガテリウムと言って、身長 6 メートルから 8 メートル、体重 3 トンもの巨獣であった。もちろん、重すぎて木に登るどころではない。地上にいて、巨大な爪で木の枝を引き寄せ、木の葉を掻り取って大量に食べていたと想像される。そんな食料大量消費型の動物が、ある時期に生活の方針を転換し、蛾や小甲虫とも提携して、省エネ生活のモデルのようなナマケモノになったのである。アメリカ人がみんなヨガの行者にでもなったら、そんな感じになるだろうか。問題は、何が悲しゅうて、こんなことになったのか、ということである。

出典：奥本大三郎「ナマケモノ」『ベスト・エッセイ 2022』光村図書出版、2022 年（一部改変）